

学芸員研究ノート サルの群れの「父子関係」

広谷浩子 (当館学芸員)

父子関係に注目

人間の社会では家庭における父の不在がとりざたされて久しいですが、私たちにもっとも近いサル社会に關しても、父子関係や社会におけるオスの役割が新たに問題にされるようになってきました。DNAを用いた父子関係の判定や、10年以上にわたって特定の個体をめぐる社会関係の変化を追う長期的研究によって、これまで単純に「父と子」とみられていたオスとコドモの關係にいろいろなものがあることがわかってきたのです。

そもそも、だれがみても明白で密接な結びつきをもつ母子関係と違って、父子関係は不確定要素の多いものです。「ぼくの腕のなかにいるこの子は、本当にぼくの子なのか？」という疑問は多くの生物のオスに共通で根元的なものです。サルの社会でも、献身的に育児をするオスと子どもの父子関係を判定したところ、生物学的には父子でないという結果が多々生じていることがわかりました。オスは実に間抜けなことをしているようですが、一定の行動パターンとして定着しているからには、それなりの理由があるにちがいありません。特定のオスとコドモの間の一見父子のような関係を紹介し、その意義について考えてみましょう。

育児行動

オスーコドモ交渉の代表的なものは育児行動です。中南米に生息する小型のサルであるマーモセット・タマリンは、母親以外の家族が積極的に育児をすることで有名です。これまで、育児をするオトナのオスは父親と考えられてきました。しかし、複数のオトナオスがいる一妻多夫型の群れも多く報告され、血縁にかかわりなくどのオトナオスもよく育児に参加していることがわかりました。赤の他人のオスは、次の繁殖のチャンスをふやすために積極的に育児をおこなっていると考えられます。

オスとコドモの同盟

父子のようだと注目されるもうひとつの交渉は、主として攻撃などの場面で見とめられます。オスは特定のコド

モといつも行動を共にして、コドモが誰かに攻撃を受けると助けます。オスが他のオスと対立して緊張状態が続くと、オスはコドモを相手のオスに差し出し、攻撃などの緊迫した状態が回避されます。コドモが自らオスの腹の中に飛び込んで2頭のオスの間に入ることもあります。このようなペアでは、オスは母親のようにコドモを腹の中に入れて運んだり、グルーミングしたりすることも頻繁にあります。こうした関係は、サバンナヒヒ、マントヒヒ、チベットモンキー、バーバリーマカクなどで観察されています。

その実例をマントヒヒでみてみましょう。マントヒヒはエチオピアからアラビア半島の一部に生息するやや大型のサルで、1頭のオスが中心のハレム型ユニットがいくつか集まって、数10頭から100頭前後の大きなグループをつくります。エチオピアで観察した野生群では、オスとコドモが実によく声をかわし合っていました。その時の細かい行動までは観察できませんでした。そこで、1993年の冬に鹿児島市の平川動物園にいるマントヒヒの群れを観察しました。群れの個体数は29頭で、ハレムは4つあり、その他ハレムを持たないオスが9頭いました。オスとコドモの間でかわされる交渉は、以下のようなものでした。

事例1 ハレムを持ち、群れの中で

もっとも優位なオスAが来ると、ハレムを持たないオスBは2歳のコドモにかけより、コドモを背中にのせてAに近づいていき、Aの眼前で方向転換して立ち止まり、お尻を見せる。AはBを無視し、コドモはBから離れる。

事例2 ワカオスCが群れの誰かと

けんかをする。その後、ワカオスCは生後1ヶ月ぐらいの赤ん坊を胸に抱いて、事例1のオスAを見ながら近づいていく。オスAとワカオスCは、見つめあひながらグーグー・グーグー・グーグーとなきかわす。

このように、マントヒヒでは、オスはけんかだけでなく、お互いの緊張をやわらげるあいさつにも、自分が懇意にするコドモを使っています。いくつ



エチオピア・アワシ国立公園のマントヒヒの群れ

ものハレムが共存し、ハレムを持たないオスも複数いるマントヒヒの群れでは、オス間関係をどのように調整するかが重要です。オスたちは、顔をのぞきこんだり、自分の生殖器を相手の眼前に呈示したりするあいさつを、いつも頻繁にかわしています。そして緊張がたかまって爆発寸前になると、切り札としてコドモを登場させて、その場のムードをやわらげるのです。

このように、「父子関係」とは、コドモには保護・食物の確保を保証し、オスには繁殖の機会や他のオスとの共存を実現する、双方が利益を得るような社会関係であるとわかりました。これらは、オスたちが競合しながらも共存するような社会で認められました。

緊迫したオスーコドモ関係

これとは対照的に、オス同士がし烈に争い、群れののつとりがよく起きるような社会もあります。そこでは、オスーコドモの関係も、時に「子殺し」という緊迫した形にまで至ります。のつとりに成功したオスが、群れにいる赤ん坊を次々とらえ殺していく行動は、最初ハヌマンラングールというインドのサルで発見され、大きな話題になりました。その後、アフリカ産のオナガザル類など20を越える種で見つかり、いくつかの種では定着した行動とみなされるようになってきました。

自分の子どもをできるだけたくさん残すという究極の目的は同じなのに、オスたちが激しく争う種と、複雑な社会交渉によって調整する種とがいるのは、興味深く、メスとの関係も加えて、さらに考えていきたいものです。